Aコース

平和通・本通・本郷通巡り 4.5km



スタート・ゴール　JR白石駅南口東側駐輪場

1. JR白石駅
2. 札幌石炭抗爆発予防試験所跡地
3. 連隊通
4. 陸軍官舎
5. 白石中央墓地跡
6. 白石村役場跡
7. 白石村医療発祥の地
8. 善俗堂跡地
9. 陸軍兵器補給廠跡
10. 鈴木レンガ工場跡

1 JR白石駅



平和通3丁目北6白石駅前広場

幌内鉄道・定山渓鉄道と白石駅

開拓使は、北海道初めての鉄道である幌内鉄道（現在の函館本線）を、明治15年（1882）に小樽から白石・江別経由で幌内まで開通させた。機関車の弁慶号と義経号は石炭を運ぶために大いに活躍した。

開通当初の白石駅は正式な駅ではなく、旗を掲げて乗客がいることを汽車に知らせて停めてもらうフラグ（旗）ステーションと呼ばれる仮乗降場だった。場所は現在の駅から100㍍ほど江別寄りである。しかしこの駅は翌16年に廃止されて駅のない時代が続き、再び現在地に駅ができたのは明治36年（1903）である。

一方、大正7年（1918）に定山渓鉄道が開通し、白石駅は20年以上にわたって始発駅を務めた。その後定山渓鉄道は苗穂駅始発、東札幌経由で運行するようになったため、昭和16年（1941）に白石駅・東札幌駅間は廃止された。



✔着いたらチェック

明治15年に道内初の鉄道として「幌内鉄道」が開通し、白石村にも仮乗降場が設けられました。

明治36年には、駅舎を備えた白石駅が誕生し、産業の発展とともに物流基地として栄えました。駅周辺には農協やコークス工場などが操業し、人や荷馬車の往来でにぎわいました。

2

札幌石炭抗爆発予防試験所跡地



平和通3丁目北1

札幌石炭抗爆発予防試験所跡地

明治から昭和30年代に至るまで石炭は燃料の主役で、わが国の石炭埋蔵量の50％を占める北海道は産炭地として大いに注目されていた。しかし採掘が深部に達し坑道が複雑になるとガス爆発や炭じん爆発が相次ぎ、北海道にも爆発予防に関する研究施設の設立が望まれていた。

昭和13年（1938）10月、商工省直轄の試験研究機関として「札幌石炭抗爆発予防試験所」という機構が設立された。そして爆発試験の影響、交通の便等を考慮し、白石村のこの地に敷地を決定し、昭和14年（1939）4月に着工、同年10月研究庁舎及び付帯設備が完成した。試験所は山林や畑に囲まれていたが、爆発試験による音響は遠く離れた民家でも聞こえた。

戦後は、戦時中の乱掘による炭鉱の荒廃、石油の普及による石炭市場の縮小などの変化に伴い、「北海道炭鉱保安技術研究所」など数度にわたる変遷を経て「北海道石炭鉱山技術試験センター」となり、平成14年（2002）まで鉱山保安のほか、メタン資源の開発・利用技術などの新しい研究にも取り組んでいた。



✔ 着いたらチェック

道内の炭坑でガス・炭じん爆発が多発したため、昭和13年に国の予防研究機関として設立。その後、燃料の主役が石炭から石油へ転換したのに伴い、北海道石炭鉱山技術試験センターとなり、平成14年まで鉱山保安のほか、メタン利用技術などの新しい研究にも取り組みました。

3

連隊通



平和通3丁目南1-4

連隊通（道道白石停車場線）

明治29年（1896）、月寒に独立歩兵大隊（明治32年、歩兵第二十五連隊に改編）が新設されたため、北海道炭鉱鉄道は明治36年4月21日、白石駅を開業した。

それまで、兵隊達は村境の横町（現 東札幌）を通らなければならなかったので、明治38年村の人が土地を寄付し、兵隊の手で道路をつくり上げた。これが連隊通である。

当初は、駅前まっすぐに道路をつくる計画であったが、用地取得が困難となり西にずれた。そのためＪＲ白石駅前広場がほとんどなく、連隊道路もずれているのである。

「栄通」で連隊通は一部切れるが、これは軍が昭和15年（1940）、この道路敷地に北部軍指令部を置き、その隣の敷地に司令官官邸を建てたためである。



✔ 着いたらチェック

明治38年（1905）に白石駅から月寒の独立歩兵大隊（後の歩兵第25連隊）への道として作られたのがこの通りです。兵隊の人力で作ったことが「連隊通」の由来。

第2次世界大戦中には沿道に陸軍兵器補給廠（ほきゅうしょう）や官舎などが建てられていました。

4

陸軍官舎

平和通2丁目南4 白中公園内



陸軍官舎

昭和19年（1944）10月、旧白石区役所付近を中心とした約４万平方㍍に、樺太・千島など北方戦線への兵器などの供給のため、北海道陸軍兵器補給廠ができた。

この兵器補給廠に勤める兵士のためこの土地に、付近の土地割とは45°北へ回した真南向きに、陸軍中佐をはじめとする将校官舎13戸、下士官などの将兵住宅32戸、計45戸の陸軍官舎が建築され、棟の間にはそれぞれひとつずつの井戸もついていた。

さらに、白中公園の地にあった２棟を廊下でつないだH型兵舎には、兵士50名ほどが駐在しており、これら住居者の熱望により、畳み3枚ほどの簀子を踏み板とした角形の五右衛門風呂の浴場が、軍隊の手により開設された。

官舎の区域全体が柵で囲われ、庇には独特の飾り板もつけられ、外壁はドイツ式の下見板、窓ガラスは横長の板ガラスで４段×２列の戸２枚が１部屋の枠組にあった。

終戦でその多くの家族が移転したが、それは兵士の４分の１が本州方面、４分の１が道内各地から来た人びとであったためであろう。



昭和19年に建てられた陸軍兵器補給廠に勤める将兵の住宅として、現在の白石小学校の東側に45戸が建てられました。

当時としては珍しいコンクリートの基礎などを取り入れた近代的な建物でした。

✔ 着いたらチェック

5

白石中央墓地跡

平和通1丁目南2 白石温水プール敷地内



白石中央墓地跡

旧仙台藩白石城主片倉小十郎の元家来たちは、自分たちが開墾した土地と札幌本府が繁栄する様子を、死後も一望できる場所として、望月寒川右岸の火山灰丘陵を墓地に選んだ。旧暦明治5年（1872）2月27日に開拓使貫属※の墓地として造成の許可を得、同じ年の7月に開設した。

大正11年（1922）、隣接地に上白石墓地から墓が移転し、昭和47年（1972）に合計587基の墓が里塚霊園に移転するまで、約100年にわたり墓地（面積12,809平方㍍）として使用された。

※開拓使貫属＝武士の身分を失わずに北海道の防備と開拓に従事する人



先祖を大切にしていた村民が入植直後の明治5年に造成した墓地。その後、都市化とともに、昭和47年までにほとんどの墓碑が平岸や里塚の霊園に移転改葬されました。

跡地には、白石温水プールなどが建てられ、区民に親しまれています。

✔ 着いたらチェック

6



白石村役場跡

本通1丁目南2 白石まちづくりセンター前

白石村役場跡

ここに、明治35年(1902)から昭和47年(1972)までの70年間、白石村役場の建物があった。

白石村開村(明治4年・1871)当初の役場は戸長の佐藤孝郷宅で、会議には隣の善俗堂(白石小学校の前身)が使われた。

明治13年(1880)に白石村外四カ村(白石・豊平・上白石・平岸・月寒)戸長役場が上白石村に置かれ、後に白石村3番地に移された。明治15年に開拓使が廃止されて函館・札幌・根室の三県時代となり、戸長役場は豊平村に移された。明治35年には白石村と上白石村が合併し、役場をこの標示板のある白石村47番地に置いた。

この場所は、開拓移民の佐藤孝郷たちが開拓地選定のために見渡した記念すべき場所である。

昭和25年(1950)に白石村は札幌市と合併し、村役場の建物は白石支所として使われた。昭和47年に札幌市は政令指定都市となり、区役所が設置されたために旧村役場の建物は解体された。



着いたらチェック

明治35年に白石村と上白石村が合併した際に、白石村役場が開設された場所です。役場の建物は、昭和25年に札幌市と合併してから、昭和47年(1972)に政令指定都市となるまで、札幌市の白石支所、白石出張所として使用されていました。

跡地には、白石まちづくりセンター・白石会館が建てられています。

7



白石村医療発祥の地

本通2丁目南 吉田記念病院前

白石村医療発祥の地

白石村は、明治4年の開村以来、長い間、いわゆる「無医村」の時代が続きました。病気になっても、村には医者がいないため、札幌からの巡回嘱託医の往診を待つしかありませんでした。

そのため、村の人たちは、一日も早い診療所の開設を願っておりました。

昭和20年5月、白石村あげての誘致に、当時札幌で個人診療所を開業していた吉田廣医師が応え、この地に移住し、村医『白石村診療所』を開きました。開村75年目のことで、これが白石村最初の「病院」となったのです。

吉田廣医師は、昭和26年に他界されましたが、同医師の白石村医療発展にかけた情熱は、その後、地域医療に携わる医師をはじめ、多くの医療担当者に受け継がれております。



着いたらチェック

昭和20年(1945)、札幌で開業していた吉田廣医師は無医村だった白石村の要請に応えてこの地に移り住み、村医となりました。

吉田医師は昭和26年(1951)に亡くなるまで、村民のために尽力し、白石の医療の礎を築きました。

8 善俗堂跡地

本通3丁目南



善俗堂跡地

ここは白石小学校の前身である善俗堂があった場所である。

入植した旧仙台藩士の子供たちの教育のため、早くも入植の翌年の明治5年3月に右28番地と29番地の間のこの場所に寺小屋式学問所を開き、4月に善俗堂と名付けた。現在の白石小学校の始まりで、札幌市では創成小学校に次いで2番目に古い小学校である。村の人たちが将来を担う子供たちの教育にいかに熱心だったかが分かる。

当時の善俗堂は、先生2人に生徒18人の小さな学問所で、校舎であると同時に村の集会所としても使われた。

明治7年2月に「村学舎」、明治14年に「公立白石学校」と改め、翌15年に現在の白石小学校の場所に校舎を新築し移転した。その後校名、修学年限などが変わり、昭和25年に白石村が札幌市と合併して札幌市立白石小学校となって現在に至っている。



白石の入植者たちは、入植の翌年（明治5年・1872年）に学問所「善俗堂」を設立。現在の白石小学校の前身です。

先人たちの教育への並々ならぬ熱意は、全ての児童が学べるように文具を貸与し、村民の寄付金を運用して基金を創設していたことからも感じられます。

✔着いたらチェック

9 陸軍兵器補給廠跡

本郷通3丁目北1



陸軍兵器補給廠跡

太平洋戦争が激しくなった昭和19年（1944）10月、千島、アリューシャン諸島などの北方戦線に兵器や物資を供給するため、陸軍は旧白石区役所一帯に兵器補給廠をつくった。函館本線から鉄道が引けて、広い土地が確保でき、月寒の軍司令部から近いという立地条件を満たしていたのだろう。広い農地を借り上げ、周囲に塀を巡らして、事務所、工場、車庫などを建て、大砲、機関銃などの保管と修理をした。分断されて使えなくなった連隊通に替えて、軍はう回路を造った。

終戦後は軍の払い下げ建物を利用した釘工場があったが、今はすでになく、補給廠があったことをしのぶ建物はほとんどない。



第2次世界大戦が激しくなってきた昭和19年、千島・アリューシャン列島などの北方戦線に兵器や物資を補給するための補給廠が作られました。

旧白石区役所周辺一帯は武器貯蔵庫や修理場、医務局など12棟の建物がありました。

✔着いたらチェック

10 鈴木レンガ工場跡

平和通6丁目南3



鈴木レンガ工場跡

白石の煉瓦場（明治・大正時代の呼称）のはじまりは、明治15年（1882）、駒沢小平がレンガに適する褐色の粘土を、現平和通6丁目北あたりで発見してからで、翌16年、遠藤清五郎の「遠藤煉瓦製造場」が2万個製造したと報告されている。

「鈴木煉瓦製造場」の初代 鈴木佐兵衛は東京生まれで明治15年9月渡道し、この地で明治17年7月（又は6月）工場を建設して、鉄道用レンガを製造したとの記録がある。

窯は“のぼり窯”で、燃料は付近の樹木を充てたので、土地が開け人口も増えると同時に、開拓者にとっては恰好の稼ぎ場となり、レンガは白石の忘れられない産業となった。

そのレンガは、道庁、ビール会社、五番館等赤レンガの建物や鉄橋にも使用された。

またこの工場では屋根瓦、甕や土管なども生産していた。

明治30年（1897）に、鈴木煉瓦製造場は白石村や月寒村に分工場を設立したが、大正11年、野幌に北海道炭礦鉄道㈱の大煉瓦場の建設やセメントの出現等で閉鎖した。



✔ 着いたらチェック

良質な粘土が産出された白石村は、レンガ製造が盛んでした。その中でも鈴木佐兵衛が始めた「鈴木レンガ工場」は、北海道での本格的なレンガ製造業の先駆けとなりました。

ここで作られたレンガは、北海道庁赤れんが庁舎、サッポロビール博物館（旧札幌製糖工場）などに使われ、札幌のまちづくりにも大きく貢献しました。

Bコース 本郷通・本通・平和通り巡り 4.5km



スタート・ゴール 白石あかつき公園
（地下鉄南郷13丁目駅3番出口徒歩2〜3分）

11 ヒグマ騒動の地
12 白石神社
13 白石本通墓地
14 水源池通
15 長浜万蔵翁の銅像

